
アルヴの神話

枕源氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルヴの神話

【Nコード】

N2312E

【作者名】

枕源氏

【あらすじ】

この世界には、能力が存在する。それは千差万別であり、似たような力はあるても、同じ力は二つとない。その能力者たちの活躍を綴った物語、それがアルヴの神話である。第一部は世界に存在する能力者たちの紹介。その第一巻では、エンジェルガーディアンの物語を。第一章は総指揮官であり、王女でもあるエレナ・ローエンの物語です。現在鋭意執筆中です。現在掲載されている物語は違うものです。第一巻が完成次第、投稿を開始いたします。

第一章 森の中の神器 プロローグ

「本当にこんなところにあるのでしょうか？」

「エンジェルがそう言っておるのだ。間違いはなかるう」

「しかし、それにしてはここは、その、なんとも……」

そう言って黒服の女性は辺りを見回す。

やわらかな日差しが木々の隙間から漏れだして、深い森の中であるにも関わらず、緊張感を忘れてしまいそうになる。

「和やか過ぎる、かの？」

黒服の女性と共に歩く白いワンピースの少女が言葉を続ける。いや、黒服の女性の膝程の身長しかない彼女は、幼女と言ってもいい容姿だ。だが、それにしては黒服の女性よりも余裕のある雰囲気纏っている。

「なに、うやうやしく神殿に祭られているより、こういった所の方が見つからぬものだ。忘れられた存在なら、なおさらの」

登りも下りもない、ただ平坦な道が続く森を二人は歩いて行く。

この森の草花はどこか整然と生えており、どこか人の手を加えられたかのように整えられている。そしてそれは森全体に及んでいる。

「なんとも不自然な森じゃの」

「ですが、やはり綺麗な場所です。これも、＜神器＞の力なのでし
ようか？」

「さあのお。わしも神器についてはよくは知らぬ。じゃが、もしそ
うだしたら」

少女はしゃがみこみ、黄色い花を一本摘み取る。

「少々、忍びないの」

茎の部分を持ち、くると花を回す。

「ですが、回収しないわけにもいきません」

「わかっておる」

花をポケットにしまい、少女は立ち上がる。

「さて、もうそろそろじゃの」

数分後、二人はほんの少しだけ開けた場所に出た。一本の切り株を避けるように、木々が半円状になっているのだ。

「ずいぶん不用心じゃの。まるわかりではないか。」

少女は呆れたように腰に手をやる。

「畏、の類はないようですが」

黒服の女性が切り株に手をかざしながら言った。

「ふむ。では始めるかの。シス力、さがっておれ」

シス力と呼ばれた黒服の女性は切り株から距離をとる。

ワンピースの少女が切り株に近づき、やはり片手をかざす。眼を閉じ、精神を集中させているようだ。

しばらくそのままの体勢でいたが、唐突に、

「シス力、しばし我慢せよ」

というと、^{シンパシー}両手をかざした。

そして、<力>を^{シンパシー}一気に放出し始めた。

あるレベル以上の能力者は、能力を使う際のエネルギーを能力に変換しないまま、放出することができる。そのエネルギーは他の能力者に干渉し効力を半減、また力の差がある場合には強烈な不快感、いわゆるブレッツシャー^{シンパシー}をあたえる。これは能力者同士が互いの存在がわかる共感作用^{シンパシー}の特性を利用した物で、上級者同士が戦う際の必須技能となっている。

少女はそのシンパシーを切り株に向け放出しているのだ。その余波を受けているのか、シス力は苦しそうな表情だ。

少女がさらにシンパシーの放出を強める。すると、切り株に割れ目ができた。その割れ目は少しずつ大きくなり、切り株の直径に達すると、瞬間微塵に砕け散った。

「ふむ、さすがにてこずったのう」

少女が力の放出を抑える。

シス力がほつとしたような表情で近づいてくる。

「お疲れ様です」

「うむ。どうやら、エンジェルの予見どおりじゃ」

切り株のあった場所には、半円状の金属らしきものが落ちていた。少女がそれを拾い、確認する。

「切り株に封印されていたからかのう。状態はいいようじゃ」

「これが＜神器＞なのですか？」

「うむ。強大なシンパシーをこの中から感じる。間違いないだろう。しかし……」

「何か、気にかかることでも？」

この神器を見たとき、そして今触れているとき、少女は奇妙なデジャヴを感じていた。

（どこか、懐かしいような、それなのに、胸が締め付けられるような……）

だが、それはあまりにもあやふやで、小さすぎる違和感だった。その感覚は記憶に残らなかった夢のように、あっさりと消えてしまった。

「いや、何でもない。さあ、戻るとするかの」

神器をポケットにしまい、その場を離れようとする二人。そこに、声がかかる。

「一体誰のシンパシーかと思えば、無限の者だとはね」

迷う間もなくシス力は右手にく黒の霧を込め、声の方向に放つ。だが、次の瞬間声はシス力の隣にいた。

「！？」

「遅い」

シス力はゆっくりと落ちていた。そう感じさせるほどに、全てが一瞬だったのだ。シス力は、いや、シス力だったものは、二つに分かれていた。胴体と、足の、二つに。

遅れて、ゆっくりと少女は声の方へと向き直る。

そこには、細身の男がいた。黒いマントをはおり、身長ほどもある巨大なデスサイズを肩にかけている。

「……デスマーブ」

男は、その格好と能力名から、度々こう呼ばれている。——死神、と。

第一話 始まりの出会い

その日も二人はいつものように切り株を机代わりに勉強をしている。

「これでいい？」

「ん。……うん、これならたぶん七十点は超えてるな」

「やつ……たー！」

背筋をのばし、そのまま後ろにゆつくりと少女が倒れる。

「これでやつと三年生卒業だね」

「中学三年生を、だけどな」

少年は少女から渡された紙に、赤のペンで次々と印をつけていく。

「いじわる。ほめてくれてもいいじゃない」

「リノは叱られて伸びるタイプだからほめない」

「いじわるー」

「……服、汚れるぞ」

「いいもん」

「今日の洗濯当番は俺なんだけど」

「いいもん」

「ったく。……八十一。……点。……思ってたより取れてる。上出来だ」

印をつけ終わり、少年は紙を少女側へ置く。だが少女は仰向けのまま動こうとしない。

「……見直ししないのか？」

「つかれた」

「そっか」

少年も少女のように仰向けに倒れこむ。

森は相変わらず静かで、遠く鳥の鳴き声が、近く虫の鳴き声が辺りを包み込んでいる。日はもうだいたい高いらしく、空を見つめる二人の視界には太陽があった。この場所は木々が切り株を避けるように林立しているため、日差しを直に浴びてしまう。夏は地獄だが、

春先の今ならばほかとしたい日光浴になる。

「このまま寝ちゃいたいね」

「だめだ。寝るならベッドでだ」

「けち」

「けちで結構。さ、今日はもう戻ろう」

「うん」

二人は起き上がり、勉強道具をてきぱきと片付け始める。

「ユウくんの袋、だいぶ傷んできたね」

「もう、五年も使ってるからな。だましだまし使ってるけど、そろそろ寿命かな」

一枚布でつくった簡単な麻袋だが、色はくすみところどころに補修用の継ぎ布をしてある。たくさんの本や辞書の重みで今にも破れそうだ。

「じゃあさ、今度作ってあげる。新しい袋」

「助かる。お返しはウミの実でいいか？」

「うん」

リノは満面の笑みでうなづく。リノにとってウミの実は特に好物というわけではない。だが、もし好物のイズミの実であったとしても、全く同じ表情をするだろう。それは嬉しいものを素直に嬉しいと表現できるということである。リノに裏表はない。こちらが洗練されるほどに、ただただ純真無垢なのである。

その笑顔を見たユウトもまた、笑みを浮かべる。ほんの少しだけ口の端をあげるだけの、微笑。表情にあまりださない、心での笑み。それがユウトにとつての笑顔だ。ひねくれているというわけではなく、心の機微の表し方を知らないだけだ。それは無知であったことのなごりなのだろう。

リノ・テファート。ショートヘアの金髪碧眼の少女。

ユウト・レスペル。頬に傷を持つ智勇豪胆な少年。

二人は五年前から共にこの森で暮らしている。人目を避けるかの

ように、森の奥深くに小屋を立て、人里に下りることもなく。このまま永遠にこの暮らしを続けるだろう。口に出すことはなくとも、共にそう心に誓っていた。だが、世界の歯車は二人を逃しはしなかった。

「あ、ペン落としてきちゃった」

切り株の場所から数分と歩かない内にリノとユウトは立ち止まった。

「切り株のどこか？」

「うん」

「取りに戻るか」

「うん」

二人は再び切り株の所へ向かう。

「……誰がいる」

「伏せろ、リノ」

二人は体勢を低くした。切り株の所には黒い服を着た女性と、若い少女がいた。

「なんでこんなところに？」

「静かに。……何をやってるんだ？」

少女が切り株に手をかざす。その瞬間、空気を震わせる程の強烈な圧迫感がユウト達に襲い掛かる。

「う……あ……」

「こ……これは……シンパシー共感作用……？」

少女が切り株に向かって膨大なシンパシーを放出しているのだ。立つことさえできず、膝をおりしゃがみ込むリノとユウト。ぐらぐらと体の中の何かを揺さぶられ、今にも気を失いそうになっている。

（もう……もたない……！）

ユウトがあきらめかけたその時、ようやく少女はシンパシーの放出をおさめた。

ユウト達は少女達の後方、そして距離もあつたおかげでなんとか耐え切ることができた。もし後五メートル前にいたら、二人は耐え切れなかっただろう。

ユウトの全身から一気に汗が吹き出す。

（なんなんだ、一体……）

ここ五年、特に問題もなく過ごす事ができた。だが、それらの生活を、もうできなくなるのではないか。ユウトはなぜか、そう確信していた。

切り株は粉みじんに割れ、その跡には金色の腕輪があつた。

「なんだろう、あれ」

「わからない。切り株の中にあつた、てことなのか？」

少女が腕輪を拾い、黒服の女性と会話をし始めたその時。それは起こつた。

いつの間にか黒服の隣にはローブを羽織つた何かがいた。そいつは手に等身大の巨大な鎌を持ち、立っている。その刃先は――血に濡れていた。

「え……」

リノが呟く。何が起こつたのか理解できない、というように。

黒服の女性は二つになっていた。

胴体と、足と。

どさり、と音が聞こえそうな臨場感。見る見るうちに血があふれ、緑を赤く染めていく。

「殺された……のか」

ユウトはギリギリのところまで理性を保っている。あのシンパシーのおかげで、ユウトの戦闘意識が臨界にまで高めることができたのだ。

「俺達に……気付くなよ……」

距離はある。だが、安心できるほどの距離ではない。祈る気持ちで成り行きを見守る。

だが、その祈りはどこにも届かなかった。

ローブの男が、こちらを見据える。それは、明らかに殺意が込められていた。殺しを生業にしているものの、躊躇のない目。

その目を見た瞬間に、ユウトは理解し、同時に決意をする。

「リノ、すまない」

リノの返事を待つこともなく、ユウトはローブの男に向かって走り出した。その胸に悲壮を湛えて。

第二話 頂の死神

遠い昔。

遠い遠い昔。

数えてみればそう大した数ではないけれど、それは遠い昔。思い出すこともないような、遠い遠い昔。誰も知らない、遠い昔。そう、遠い遠い、昔のお話。

不規則な振動に揺らされ、少女は意識を取り戻し始めた。

「あ、起きた？」

リノが話かけるが、まだ朦朧としてるらしく、少女は返事をしない。

現状を確認してるのか、首を左右に動かしている。

今、リノとユウトは走っている。ユウトは少女を抱えながら走っているため、表情は硬い。リノも辛いはずだが、少女に心配をかけまいと、常に笑顔を浮かべている。

「……お主たちは」

「あ、私はリノ。で、あなたを抱っこしてるのがユウク……じゃない、ユウトっていうの」

「何が起きたのじゃ……デスマーヴはどうなった？」

「今はそれどころじゃない。もう少し走ったら、説明してやる。」

ユウトの言葉にリノがうなずき、少女も口を閉じた。

二人は全力で森の奥深くへと走っていく。

「ん……」

ローブの男がゆっくりと立ち上がる。周囲に意識を向けるが、人の気配はないようだ。

「いや、こいつの能力か」

足元の死体を見下ろす。胴と足の二つに別れ、出血もひどい。生

きていることはないだろう。

だが、どことなく森全体が薄暗くなっている。攻撃を仕掛ける前、黒服の女の手には霧状の何かがあった。それがいつのまにか森に蔓延しているのだ。そのせいで、いつもは数十キロさきの能力者の位置がわかるはずなのに、今はせいぜい数十メートルでもわからないほどに感覚が鈍っている。

「あの一瞬で、か。……まあ、いつれ消えるだろう。さて、あの子供を捜すか」

男は森を見渡す。そして、ある一点で動きを止めた。

次の瞬間には男の姿は消えていた。

切り株のあった場所から二十分。走り続けた二人は少しの休憩を取っていた。

「はあはあ……もう少ししたら、出発する……」

「うん……」

リノの疲れも激しいが、子供とはいえ一人を抱えて走ってきたユウトの体力も限界に近い。それでもまだ二人は走り続ける気である。

木を背もたれに、少女はそんな二人を見つめていた。

「リノとユウト、と言ったか」

少女の問いかけに二人は目だけで返事をする。

「わしの名はフィア。神の島から来た」

「神の島？」

ユウトがいぶかしげに目を細める。

「名ばかりの島じゃ。神は住んでおらん」

フィーリは自嘲気味に笑い、話を続ける。

「詳しくは話せんが、特殊な者達が集まっている場所じゃ。わしも、この姿じゃがもう百年近く生きておる。そしてわしらの目的の一つに、神器の回収がある。これがそうじゃ」

フィアがポケットから金色の腕輪を取り出し、二人に見せる。な

んの装飾もない、どこにでもあるようなへんぴな腕輪だった。

「ある者から情報を得てな。もう一人の護衛と共にここにきたのじや。無事神器は回収できたものの、デスマーヴに見つかってしまった」

「あの、ローブの男か」

「ファイがうなずく。」

「お主たちは、＜神々の頂＞を知っておるか？」

リノは首を傾げるが、ユウトの表情がこわばる。

「あいつが、そうなのか？」

「ああ。神々の頂でもトップクラスの能力者。ホーク・ビリーヴ、能力＜デスマーヴ＞を持つ男じゃ」

神々の頂。イヴォルブ帝国に本拠地を持つ、最強最悪の能力者組織。そこに属する能力者は一人で小国の軍隊と渡り合えるほどの力を持つと言われている。

「最悪だな」

ユウトはそう呟くが、言葉とは裏腹にその表情は少しもあきらめてはいない。むしろ、さらに覚悟を決めたかのように見える。

「わしについてはここまでじゃ。……それで、お主らは何者なんじゃ」

ファイの言葉に、二人は沈黙する。リノもユウトも、なぜか悲しげな瞳をしている。

「リノはリノ。ユウくんは、ユウくんだよ」

リノがそう呟く。それは自分自身に語りかけているかのような、重い呟きだった。

二人の様子が急に変わったことに疑問を感じるファイだったが、今はそれどころではない。とにかく話を聞こうと話題を変える。

「ああいや、お主たちの過去や身分を知りたいわけではない。ただ、どうやってデスマーヴから逃げ出せたのか知りたいのじゃ。能力を使ったのかどうか、な」

あまり定かではないが、デスマーヴはユウトたちの存在に気付い

ていたように思う。それでなお、逃げ出せたということは、何らかの能力を使った、とフィアは考えていた。

「俺の……能力だ」

ユウトが消え入りそうな声で言った。なぜカリノも苦しげな顔をしていた。

「それは、もう一度奴に通用すると思うかの？」

「無理だ。あの時は、ほとんどの意識がフィアにいつていた。だから、俺が渾身の力を使ってなんとか成功したんだ。二度目は……ない」

「そうか……」

後一度でも、と期待していただけに、フィアは肩を落とす。

「ゆっくりしすぎた。そろそろ行こう」

ユウトがフィアを抱えようとしたが、フィアはそれを拒む。

「最後にもう一つだけよいか？」

「ん、ああ」

「なぜ、わしを助けた」

デスマーヴの足止めに成功したのなら、そのまま逃げればよかったはずだ。見ず知らずのフィアを抱えて走る義理はない。そうすれば、もつと遠くまで逃げることもできたはずだ。なぜ、それをしなかったのか。フィアはそれがわからなかった。

ユウトの目をじっと見つめ、答えを待つ。しかし、その答えは明瞭なものだった。

「……放っておけるかよ」

ほんの少し照れくさそうに、しかし、確かな意志を伴う瞳でユウトは答えた。

その答えに、フィアは笑みを浮かべる。

「全く。どいつもこいつも自己犠牲が過ぎる」

その笑みは全然年相応ではなく、いや、だからこそ、フィアそのものの笑顔だった。

「さあ、急ごう」

ユウトがファイアへ手を伸ばす。

「――伏せるんじゃない！」

ファイアが叫び、ユウトは迷う間もなくリノに覆いかぶさるように倒れこむ。

そこに、何かが空気を裂く音と、そしてたくさんの何かが切られる音が近づいてくる。

デスサイズ
それは鎌であつた。

巨大な鎌が回転しながら辺りの木々を次々と切り倒している。きれいな弧を描きつつ、紙を切るかのような滑らかさで周囲を切り開き、三人の周り是一片切り株だけとなっていた。

「これで見晴らしがよくなった」

森の影からゆっくりと男が姿を現す。鎌はまるで生き物のように男へ方向を変え、手元に収まった。

「さて、一体何をしていたのか、説明願えるかな。永遠少女よ」
ネバー・エバー

ローブの男、ホープ・ビバリー、能力名くデスムーヴは、冷たい目で三人を見据えた

第三話 神器と自己犠牲

霧が深くなつてゆく。

人の手が加えられずとも、なぜか規則正しく林立している木々であるが、それでも森であることに変わりない。日の光は例え昼間であつても地上に届くのはごくわずかである。その上で霧が出てきてしまえば、数メートル先を見ることさえ困難になる。そういう意味では、デスマーヴによる“伐採”は功を奏したといえる。

切り株を足場に、少しづつホークは近づいてくる。

「あれほどのシンパシーを放出していたんだ。何もないわけではないだろう？」

ホークの目に、迷いはない。手段を選ばずに目的を語らせるだろう。いや、もしかしたら目的にすら実は興味がなく、攻撃範囲内まで近づき終えたら、殺されるのかもしれない。ユウトがそう思つてしまうほどに、ホークは殺氣立っている。

だがその考えすらも、まだ甘かった。

「まあいいさ。とりあえずその二人は殺しておこつ」

何を言われたのか、理解できなかった。だから、反応することさえできなかった。

ホークが目の前にまで来ている。そして、大鎌を振り下ろしている。そう、もう“振り下ろして”いた。ユウトはまぶた一つ動かすこともできずに、体を引き裂かれるだろう。

「——まいったな。まさかかばうとは思わなかったよ」

ユウトの目の前に、白い服の少女がいる。綺麗に手入れされた長い黒髪が、清流のようなゆるやかさでなびいていた。

フィア。少女は、そう名乗っていたはずだ。

「フィア！」

崩れゆくフィアの笑みに、ユウトは覚えがあつた。小さな女の子らしからぬ、妙に大人びた微笑み。その表情のときに、彼女はこう

も言っていた。

『どいつもこいつも自己犠牲がすぎる』

それは、一体誰を指していたのだろうか。

「ファイア！ しっかりしろ、ファイア！」

目の前の死神に構わず、ユウトは叫び続ける。血の滴る大鎌の切っ先が、いつ自分に向けられるかわからないのに。

ファイアの右肩から左腰にかけて、袈裟懸けに傷が走っている。その傷の深さは心臓にまで達していて、助かる見込みはない。

それはホークにとっても意外なことだったようで、やや眉をひそめ、ただ状況を整理している。

白いワンピースは少しずつ紅に染まっていき、地面にも広がっている。

ファイアの命は、もはや絶望的であった。

リノは目を見開いたまま、それを見守るしかなく、ユウトもまた、叫ぶことをやめ、血にぬれた少女を見守るだけであった。

霧もまた、その少女へ集まるかのように深くなっている。いや、霧は確実にフィーリの元へと集まっている。

その色はどことなく色彩を帯びていて、ファイアを覆う量が増えるたびにはつきりとしていく。

その霧は、紫の色をしていた。

その異様さに気付き、ホークはファイアから距離を取った。それと同時に、ホークのいた場所にナイフが突き刺さった。

「これは……さっきの女か」

周囲に目をやるが、霧が深く、森の奥まで見渡すことができない。シンパシーを捉えようにも、いたるところにシンパシーが放出され、能力者そのものを捉えられない。

「自然操作、いや、自然生成系能力者か」

ホークはデスサイズを構えなおし、戦闘態勢をとる。

先ほど投げつけられたナイフがゆるりと宙に浮き、ホークへと向きを変え、一気に飛んでいく。それを器用にデスサイズを操り叩き

落すが、ナイフは地面に落ちることなく再びホークへと向かう。それを柄で払いのける。そこにさらにナイフが別の方向から飛んでくる。だがそれを目にも止まらぬ速さでホークは避けた。

「確かに殺したはずだがな。……まあいい、相手になるさ」

さして表情を変えることなく、ホークは二本のナイフを見据えた。

その光景をなすすべなく見ていたユウトだが、ふいに光るものが目の端に移った。そこに目をやると、ファイアが神器と呼んでいた腕輪だった。

なぜそうしたのかはわからない。何か、ひきつける魔力のようなものがあつたのかもしれない。少なくとも、そのときのユウトに、神器というものの真の力をわかつていなかった。しかしそれでも、彼はそれにひかれてしまっていた。

ユウトが腕輪を手に取り、自分の右腕に通してみる。

そのときに、ユウトを取り巻く全ての運命が、ようやく回り始めるのであった。

第四話 死を運ぶ鎌

腕輪はユウトの手首に張り付くように隙間なく形を変化させる。

きつくはないが、決して緩くはない。一ミリずらすこともできないほど、腕輪は手首にがっちりとはまっている。さらに、その腕輪から大量のシンパシーがユウトの体内に流れ込む。その量はフィアが切り株へと放出したシンパシーとほぼ同じであった。

それほどのシンパシーをホークが感じていないはずがなく、今や十本のナイフをかわしながらもそれを危惧していた。

（あの腕輪をしてから、シンパシーが十倍以上に跳ね上がった。何かあるな）

曲芸士のごとくデスサイズを操り、迫りくるナイフをわずかな動きだけでよけている。ナイフは緩急をつけながら死角からもホークへと向かっていくが、そのどれもがすり傷すら与えられずにいた。（……霧の能力者は後回しだ）

霧はさらに深まり、ユウトの姿を目で確認することはできない。だが、シンパシーにより居場所を特定することはできる。それだけで十分だった。

次の瞬間、ホークはルークの頭上へと振り下ろされていた。

ホークの<デスムーヴ>は「あらゆるものを移動させることができる」能力だ。そのごく単純で、なんの危険性もないかのような能力を彼は極め、<頂>にまで上り詰めた。そうして極めたもの、それが移動を突き詰めた移動、<瞬間移動>だ。操作系に属する能力を、空間干渉系へと昇華させたのである。

刃が振り下ろされる。が、それを白刃が受け止める。

「やはり、生きていたか」

誰もいなかったはずのそこには、黒の服に身を包んだ女性——フィアからは、シスカと呼ばれていた——が、デスサイズを細身の刀で受け止めていた。ホークが一旦さがるためにわずかにデスサイズ

を引いたところへ、操っていた十本のナイフを再び向かわせる。それを察したホークは瞬間移動で霧の奥へと身を隠した。

「あなたは……」

「その子連れて逃げなさい」

有無を言わさない、拒絶にも近い口調でシス力は告げる。

「けど」

「フィア様の死を無駄にする気ですか！」

後ろを振り返らずに、シス力は一喝する。その背中からは悲しみは感じられず、しかしその声はわずかにかすれていた。——ユウトはそれを理解し、躊躇を捨てる。

地面を蹴りつけるように勢いをつけ、リノの手を取りその勢いのままにユウトは森の奥へと走った。

シス力はそれを気配だけで確認し、すぐにホークへと意識を向ける。

ホークはシス力を注視している。だが、それだけではない、別の何かをみているようでもあった。

「ずいぶんと疲れているようだな」

「……なんのことでしょう」

「森全体に霧を張り巡らせるということ事体相当の力を使っているだろうに、なあ」

ホークはフィアを一瞥し、そしてユウトたちが走り去った方角をみやる。

「なぜ生き返ったのか、予想はつく。だから」

デスサイズを水平にし、大きく横に右腕を伸ばす。

「しばらく休んでいるといい」

ローブを翻し大きく回転しながら、デスサイズを離す。死の鎌は、能力<デスムーヴ>の力を受け

円を描き、回転しながら超高速で森を移動し始める。

鎌は森の木を切り倒していった時よりもさらに高速で、常人の目ならば追うこともできない速さで移動する。それはある点を中心に、

円を描きながら塗りつぶしていけば、どこかの点を必ず塗り潰せる、という考えの単純な攻撃。ごくごく単純なこの攻撃は、しゃがむか高く跳びあがれば回避することができたろう。だが、それを行うにはデスサイズの動きは速すぎて、シスカの体は疲れすぎていた。

目の前にいた「霧で作られたシスカ」を一瞬で切り裂き、その間にはすでに周囲三百メートルは塗り潰されていて、五百メートルを過ぎたところで、シスカの体は鎌によって、再び二つへと分かれることになった。

「あ……あ……」

霧で作られたシスカは、呆然とした表情のまま、霧散した。

第四話 死を運ぶ鎌（後書き）

やめようと思ってしまった弱い心を、どうにかまた沈めることに成功した。もう浮かんでこないでほしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2312e/>

アルヴの神話

2010年10月16日02時41分発行